

絶対的知識と静寂主義

山下智弘 (Tomohiro Yamashita)

慶應義塾大学

本発表の目的は、論理学についての Sebastian Rödl (主に 2018, 2024) と Irad Kimhi (2018, 2024) の考えを紹介し比較することである。

論理学の対象は事実一般ないし思考一般の形式であり、その形式は変項 p を用いて表すことができる。論理学は p の学である。

Rödl と Kimhi は、論理学が特定の存在領域についての学でもなければ、思考の自己意識にとって外的な形式についての学でもないと考え点で共通している。両者にとって、 p の学は、 p という形式が存在のうちの 1 つの領域を区切ると考えた上で、その領域に関する非経験的な思弁を巡らせる活動ではない。すなわち、 p の学は事実の形而上学や心の形而上学ではなく、そもそもいかなる「 X の形而上学」でもない。加えて、両者にとって p の学は、外部のない最大の普遍性によって特徴づけられる実質的真理の学でもない。言い換えれば、 p の学は、唯一の領域、それを領域と呼ぶことが憚られる領域についての学でもない (ただし、Rödl 2005 での Rödl は、こうした普遍主義的論理学観を肯定している)。

Rödl と Kimhi の考え方の違いは、このようにして論理学から内容を排除した結果として、論理学がどのような姿をとるか、という論点に表れる。論理学の文は何も述べていないように見える。論理学の文によっては何も考えることができず、それゆえ、何も知ることができないように見える。例えば、 p が有意味な文であり、「非 p 」や「 p かつ q 」が真理操作を含む有意味な文であったとしても、「 p かつ非 p 」は無意味である。そして、「 p かつ非 p 」こそ矛盾律の述べていることに他ならない (矛盾律は何も述べていない)。同様にまた、「 p あるいは非 p 」は何も述べていない。

論理学の文は何も述べていないように見えるという、この見かけが真実であると肯定し、論理学においては何も考えられておらず、何も知られていないとする立場を静寂主義と呼ぶならば、Kimhi の立場は静寂主義である。Kimhi にとって、論理学はそれに反対することが無意味なものであるが、これは、論理学そのものが無意味であるからだ、と言えるだろう。Kimhi の立場からは、論理学が何かを思考し、知っているという考えはすべて、論理学はそもそも判断ではないという静寂主義への過渡的形態である。

これに対して Rödl は、論理学において何も思考されておらず、何も知られていないという考えに反対する。Rödl によれば、論理学は思考であり、知識であるが、それは、論理学が特定の対象ないし対象領域について考えるからではなく、論理学は特定の内容が与えられることを必要としない思考だからである。こうした Rödl の立場からすれば、Kimhi の静寂主義は、思考はすべて何かを思考することであり、知識はすべて何かを知ることであるという誤った前提に依存していることになるだろう。それに対して、Rödl の立場において、論理学は何かを考えることではなく、考えることそのものであり、何

かを言うことではなく、言うことそのものである、ということになる。他のものを何も必要としないものを絶対的と呼ぶならば、Rödlにとって論理学は絶対的知識である。

RödlとKimhiのもう1つの、しかし単に潜在的な対立は、言語の扱いに見出される。フレーゲが区別した3つのもの、すなわち思考・判断・主張について、Rödlは思考が判断と思考の最大公約数であるということを否定する。すなわち、思考は判断よりも論理的に単純であり（これは必ずしも、思考が判断よりも論理的に基礎的であるということの意味しない）、判断は思考を含む複合体であるという考え方を否定する。Kimhiもこの点では同じだが、Kimhiはさらに、判断が判断と主張の最大公約数であるということを否定する。そして、KimhiはRödlの考え方がこの第2の否定を遂行することを不可能にすると述べ、Rödlはそれが誤解だと反論している。

Rödlの絶対的論理学観とKimhiの静寂主義的論理学観の間には、果たして実際に違いがあるのか、もし違いがあるならば、どちらの主張（2人にとって、それは主張ではないかもしれないが）が正しいのか。本発表ではこれらを明らかにすることを目指す。

Kimhi, Irad. 2018. *Thinking and Being*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Kimhi, Irad. 2024. 'On the Linguistic Turn Away from Absolute Idealism'. In *Reading Rödl: On Self-Consciousness and Objectivity*, edited by James Conant and Jesse M. Mulder, 162–72. Abingdon, Oxon ; New York, NY: Routledge.

Rödl, Sebastian. 2005. *Kategorien des Zeitlichen. Eine Untersuchung der Formen des endlichen Verstandes*. Frankfurt/Main: Suhrkamp.

Rödl, Sebastian. 2018. *Self-Consciousness and Objectivity*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Rödl, Sebastian. 2024. 'Replies'. In *Reading Rödl: On Self-Consciousness and Objectivity*, edited by James Conant and Jesse M. Mulder, 334–425. Abingdon, Oxon ; New York, NY: Routledge.